ピーカンパラダイス

巻機山／谷川岳(2023/3/6-7)

Ｌ：Ｉ崎、Ｈ口

Ｉ．巻機山・米子沢下降

　グラマン戦闘機のような音を立ててＩ崎車は関越道を走っていた。走りながら気に掛けていたのは前方に見えてきた谷川岳である。天気予報では晴れとなってはいるが昨晩からの雨雲がまだ谷川岳の上部を覆っている。
「う～ん、あれじゃあ昼過ぎまで視界が無いな。今日と明日の予定を替えて今日は巻機山にしようか。」
　できれば今日のうちに谷川岳に行きたかった。と言うのは谷川岳ロープウェイが明日は定休日となっていたからだ。しかしまあしょうがない。

　関越トンネルを越えた先にはのんびりとした空が広がっていた。清水集落手前の工場からは白い煙がのびやかに上がっている。
　取り付き口まで来ると平日であるが既に車が１２台停められていた。ヤマレコによれば昨日は１００台も停めてあったらしいから巻機山の人気のほどがうかがえる。

　８：４０、シールを付けて川沿いの道を歩き出す。しばらく進むと左手に黒く鋭角的な天狗岩が見えた。雪が付かずそこだけ目立っている。
　桜坂の駐車場を越えた所から井戸尾根に取り付く。昨年１０月にＩ崎さん、Ａややと沢登りで来た時には米子沢を上ってこの尾根を下りてきたが、今日はまるきり逆で井戸尾根を上がって米子沢を滑り下りることになる。途中でアイゼンで上って行く人たちを４人ほど追い越した。この斜面では浮力のあるスキーの方が上りやすい。

　１０：３５、五合目の見晴らし台に出た。ここからは米子沢の懐が見渡せる。
「ほら、結構トレース付いてるな。」
　あそこを滑るのか。大滝の下辺りではトレースは底面を通らず左岸を巻くように付けられていた。

　さらに一時間ほど上ってニセ巻機山手前の台地に出た。こちらは青空が広がっているが振り返って見えた谷川岳の稜線は相変わらず分厚い雲に覆われている。
「あれじゃまだしばらくは雲が取れないな。」
　こちらへ来て正解だった。クトーを取り付けてニセ巻機山の斜面に取り掛かる。
　急斜面のトラバース。前を行くＩ崎さんの先には真っ白な斜面と真っ青な空。
「クトーを効かせて」とＩ崎さんから声が掛かる。一歩一歩行くよりもダブルストックで二歩ずつ歩いた方が安定するような気がした。

　１２：４０、ニセ巻機山のピークに着くと頂上から下りてきたスキーヤーに会った。単独なので米子沢には行かず往路と同じ井戸尾根を下るそうだ。
「今はこんなに晴れてるけど、朝上って来た時はこの辺ガスってましたよ。」
　ちょうどいいタイミングで上がって来れたものだ。
　クトーだけ外してシールのまま避難小屋の所まで今日初の滑降をする。避難小屋の所とは言ったものの雪に埋まっていて形は見えない。

さあ、最後の上りだ。まあるく平たい巻機山への広大な雪原を上がって行く。先行者が一人いる。あまりに広い雪原の中では小さくうごめく黒い点だった。
１３：３０、山頂に着いた。左には割引岳、奥には越後三山が見える。３６０度の景色をしばし楽しんだ。

１４:００を待って滑り出す。小尾根の雪面で気持ちよいターンを繰り返す。最高！そして米子沢に入って行く。右も左も一面真っ白な迷宮。この下はナメなんだよなと思いながら振子になったように斜面を滑って行く。

長い下降、だんだん雪が湿り気を増してきた。Ｖ字谷が狭まった所では小さなデブリがいくつか見られた。
「これなんてまだ新しいな。だってほら、トレースの上に掛かってるだろ。」
さっさとここは越すに限る。

大滝、ナメ沢を越えて斜面が緩やかになった所で一本取った。１，０００ｍ下りてきたがここまで３０分ほど。スキーの機動力だ。
「こっからは河原だからさぁ、トレースの上をボブスレーだな。」
「我々最近ボブスレーが続きますね。」
「いやいやいや、１号しゅっぱーつ！」
５ヵ月前にはゴーロだった所をツーっと滑って行く。

桜坂の駐車所を越え、橋を渡った。下は固くスピードが増す。板を取られＩ崎さんがひっくり返った。
「大丈夫ですか？」
「転んだおかげで絶景が見れた。」
ちょうど真横に真っ黒な天狗岩があった。ただでは転ばない人である。
そのまま滑り下り車道まで戻ったのは１４：５０。５時間掛けて上った所を１時間足らずで下りてしまったわけだ。それにしても沢登りで上って山スキーで滑って米子沢はどちらも素晴らしい体験をさせてくれた。巻機山に妙な親近感が湧いていた。

湯沢の『駒子の湯』で一息ついた後、沼田のスーパーへ買い物に立ち寄った。駐車場からはトマの耳、オキの耳が見えていた。
「やっと雲が取れたな。明日はきっと絶好のコンディションだろう、うん。」
毎日谷川岳を見て暮らす人の目に間違いは無いだろう。明日は大冒険が待っている。

Ⅱ．谷川岳・赤谷川源流部下降

５時過ぎの関越道、今日もＩ崎車はグラマン戦闘機の音を立てて突っ走る。空はまだ薄暗く谷川岳はシルエットに近いが好天になる事は間違いない。
水上I.C.を出ると谷川岳ロープウェイの看板があり『本日定休日』と表示されていた。既に我々には下から歩いて上るぞという覚悟はできていたが、目の当たりにするとやはりうんざりする。
登山口に着くと定休日でも車が５台ほど停められていた。いるんだな他にも。

６：４０、シールを付けて歩き出す。
「カリッカリだ。あれだな、アイゼン履いて上がった方がいいかもな。」
３０分ほど歩いた所でアイゼンを取り付け、板を担いで斜面を上がることにした。地面を蹴り込みながら少しずつ上がって行く。ところがである、左足のアイゼンが緩んで外れた。セットし直し再び上り始めたが、またも外れる。こないだサイズ調整をしたばかりなのにおかしい。右足は大丈夫なのだが。そんな事を繰り返しているうちにＩ崎さんはだいぶ上まで行ってしまった。仕方が無いので左足のアイゼンを外して上ることにした。雪面はある程度固かったのでスキー靴でも支障は無かった。

Ｉ崎さんの待っていた所まで上がり見てもらうとアイゼンがだいぶ緩い。本当こないだ調整したばかりなのに。ネジバカになっていてその場で調整ができなかったので応急処置として持っていたガムテープで固定してみた。しばらくこれで様子を見よう。オジカ沢の頭まではずっとアイゼンで行くのでもしこれでダメなら残念だが途中であきらめるしかない。

ロープウェイ駅の高さまで上ってきた所で一本を取った。右手に大きく白毛門が聳えている。アイゼンは何とか大丈夫だ。時間は９時になっていた。
「２時間掛かっちゃったな。」

まもなく天神尾根の稜線に出た。谷川岳に向かって進んで行く。すると今まで問題無かった右足のアイゼンも緩み出した。こちらも残りのガムテープで固定する。

Ｉ崎さんは熊穴沢の避難小屋の所で荷物を下していた。
「朝３時に上がって来た連中が下の小屋に入ってるよ。上行ったらカリッカリで横滑りで下りたって。昼になって雪が緩むまで中で待ってるってさ。」

稜線のルートは上りになる。急な所には溝のようにはっきりしたトレースが付けられていた。肩の小屋より１００ｍくらい下の平らな所で一本取る。時間は１１：３０。
「もう３時の列車には間に合わないから５時のにしよう。」
完全な青空の下、そこからはオジカ沢ノ頭に続く稜線がよく見えていた。
「あそこに黒い岩が２つ見えるだろ。あそこを左から巻かなくちゃいけないんだよ。」

再び歩き出し肩の小屋をスルーしてオジカ沢ノ頭までの稜線に取り掛かる。ここが今日の核心部だ。
「トレースが付いてるとありがたいな。たぶん日曜に歩いた跡だろう。」

オジカ沢ノ頭へと続く稜線は眺める分には映えるほどの美しさだが歩くとなると緊張する。念のためアイゼンをテーピングテープで補強した。
「心配だったら早目にピッケル出しといたほうがいいよ。」
幸い風は無い。板を背負ってる時に突風に吹かれたら堪らない。
「景色を見る時は必ず止まってな。」

黒い岩が近づいて来る。稜線の右は切れ落ちているから左から巻くことになるが、左だって右ほどではない程度に下まで落ちている。トレースを辿って左に回り込むがなぜかそこでトレースは切れていた。

Ｉ崎さんはピッケルを突きながら斜め上に向かった。僕もピッケルを突いてＩ崎さんの踏み跡を忠実に辿る。
もう少しもう少しと進み、１３：２０、ついにオジカ沢ノ頭に到着した。３６０度の見晴らしだが風が出てきたのですぐ下にある避難小屋の所まで下りた。
ここでスキー板に履き替える。何とかここまでアイゼンは持ちこたえてくれた。

丘のような斜面を滑り降りると真っ白で広大な斜面が目の前に現れた。
「ようこそ赤谷川スキー場へ！」とＩ崎さんが顔をほころばせながら言った。昨日の米子沢に輪を掛けて広々とした広大な斜面。そしてしびれを切らしたように
「ヒューっ、ヒューっ・・・」と雄たけびを上げながら滑り出した。
よし、僕も。広い斜面に向かって飛び出す。ザーッ、ザーッ・・・とターンの度に心地よいフィーリングが板から伝わって来る。
Ｉ崎さんの所へ追いつくと
「今度は先に行っていいよ。」
では、いただきます。ザーッ、ザーッ・・・、真っ白な世界の中に自分も同化する。これまでの長いシートラ歩行を補って余りあるほどの極上の滑りを楽しめた。

斜度が無くなり沢が左へ折れる所でストップ。一休みしてここでシールを付ける。できればこのまま滑り下ってゴールとしたかったが、本当のゴールは一山越えた向こう側にあるのだ。
赤谷川への谷筋を離れ正面の谷筋を上がって行く。上がっても上がっても先が見えない上り。途中で一本入れクトーを取り付けた。

歩き出すと上方に万太郎の頭が見えたがかなり先だ。
「あそこまで上がるんですか？」
「あれ越えなきゃ帰れないよ。」
斜度を増した斜面はザラメになりエッジをうまく効かせないと足元が崩れる。雪面を反射してくる光が陽の傾きを感じさせた。
先行するＩ崎さんから「稜線に着いた」との声が上がった。そこから２回キックターンで切り返してやっと稜線に出た。

稜線の向こうはカリカリの急斜面だったのでクトーを効かせてカニ歩きで５０ｍほど下る。
「あそこにトレースあるから向き変えてあそこまで行こう。」
クトーとシールを外して滑降モードにした時は１６：２０になっていた。
「どう見ても５時には間に合わないから６時の列車だな。６時も危ないぞ。」

万太郎からの下り、こちらも広く長い斜面だ。台地に向かって一気に滑る。台地から振り返ると滑って来た広い斜面の先に万太郎の尖った頭が立っていた。
樹林帯に入ると雪が重たくなってきた。それと足の疲れのせいか雪に板を取られて転倒するようになった。

長い下りを滑りようやく毛渡沢にぶつかった。沢沿いに進むが割れている所が多い。
「雪が少ないんだな。こんなに割れてることはないよ。」
渡れない所は無かったが今にも切れそうな所があった。

１７：２０、林道に出た。Ｉ崎さんはいったん止まるも
「休まずにこのまま行くよ」とそのまま林道を滑り出す。林道は下ってはいたが途中で出て来るカニ歩きの上りがまた足に堪える。同じように滑ってもなぜかＩ崎さんは早く距離が開いて行く。

やっと国道に出たのは１８：００。しかしそれは惜しくも列車に間に合わない時間だった。頑張ったのだが…。周りの景色と同様に心も薄暗くなっていた。
結局、湯沢までタクシー、新幹線で上毛高原、そこから谷川岳ロープウェイ駅までタクシーで車を回収することにした。

土合を越えたタクシーの窓越しに満月に照らされた谷川岳のシルエットが見えた。今回はいろんな場所から谷川岳を眺めたな。
たいへんなたいへんな一日であったが、じわじわと思い出されるいろいろな景色。体はヘトヘトだがピーカンの下での大冒険はこの上ない充足感に満ちていた。

（Ｈロ　記）

巻機山
清水集落 8:40 — 10:35 五合目 — 12:40 ニセ巻機山 — 13:30 巻機山 14:00 — 14:50 清水集落

谷川岳
登山口 6:40 — 10:10 熊穴沢避難小屋 — 11:50 肩の小屋 — 13:20 オジカ沢ノ頭 — 15:55 万太郎山稜線 — 17:20 林道 — 18:00 国道